

# 佐久大学・国際看護論におけるタイ王国での演習と学び

著者	塩入 とも子, 東田 吉子
雑誌名	佐久大学看護研究雑誌
巻	12
号	2
ページ	157-165
発行年	2020-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1050/00000263/">http://id.nii.ac.jp/1050/00000263/</a>



活動報告

# 佐久大学・国際看護論における タイ王国での演習と学び

Practice and Learning on International Nursing Theory,  
Saku University in Kingdom of Thailand

塩入 とも子 東田 吉子

Tomoko Shioiri, Yoshiko Tsukada

キーワード：国際看護論, タイ王国, 看護教育

Key words : International Nursing, Kingdom of Thailand, Nursing education

## 要旨

佐久大学では、4年次の選択科目として国際看護論(2単位、60時間)を履修できる。演習としてタイ王国チョンブuri県、ブラパ大学看護学部(Burapha university, Faculty of Nursing, Chonburi, Thailand)にて、講義、施設見学などを2019年8月19日～28日までの10日間実施した。本科目は、国際的な視点から諸外国の健康問題および心身の健康に影響を与える社会・経済、および文化・伝統的な背景を検討しつつ看護活動のあり方を学ぶため、「日本とタイの相違点、および類似点について、事前学習した範囲において説明をすることができる」「現地での学習・交流を通してコミュニケーション能力を高め、国際的な視点を広げる」という到達目標を掲げている。履修学生12名は、演習を通して①日本で自分たちが学修している看護との相違点、類似点について気づき、②タイの看護の背景となっているタイ王室との関係、文化・歴史的経緯について理解を深め、③ブラパ大学のバディの学生との交流を通して英語でのコミュニケーションの必要性を認識し、④国際的な演習プログラムを通して看護観が大きく広がったことを感じていた。

## I. はじめに

佐久大学では、教育目標として「国際的視野を持ち、看護を通じて国際貢献できる能力を育成する。」ことを掲げている。学生は4年次に国際看護論(2単位、60時間、選択科目)

において、タイ王国(以下タイ)での演習を行っており、今年度(2019)で9年目を実施した。全国の大学看護学科を対象に「国際看護学」の実態調査を行った蛭田, 久保, 山野内(2017)は、海外研修を実施している大学は58.9%、実施していない大学は31.1%、計画中は4.4

受付日2019年9月30日 受理日2020年1月21日  
佐久大学看護学部 Saku University School of Nursing

%という結果を報告しており、約60%の大学が海外研修を行っている現状が明らかとなっている。本学における、今年度の国際看護論の履修者のなかには、「入学前から海外研修を行っていることを知っており、絶対にこの科目を履修しようと思っていた」という意見があり、佐久大学へ入学する1つの魅力となっていると考えられる。国際看護学実習への期待と達成として須藤, 樋口(2014)は、「人間性の成長」「現場に行くことで実感できる

経験」「国際看護活動実践へのきっかけ」「日本以外での生活体験」の4因子があり、実習後は「現場に行くことで実感できる経験」が期待していたこととその実習後の達成に有意差があったことを明らかにしている。学生たちは、現地に行きさまざまな経験をすることで、机上の学習では得ることができない刺激や学びを得ていると考えられる。国際看護論の履修学生数は、表1に示す通りであり、年度により変化はある。しかし、過去2年は10人前

表1 国際看護論履修者の年次推移

実施年	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	合計
履修者数(人)	5	8	9	14	11	8	2	8	12	77

表2 スケジュール表 (2019年8月19日(月)~28日(水)までの10日間)

Date	Time	Activities
Day 1 Monday August 19th	AM	タイへ出発
	PM	歓迎会
Day 2 Tuesday August 20th	AM	施設見学: プラパ大学中央図書館 講義: タイのヘルス・システム プラパ大学にてオリエンテーション バディさんと面会
	PM	
Day 3 Wednesday August 21st	AM	施設見学: プラパ大学看護学部内 講義: タイの看護教育 ナーシング・スキル大会&文化交流の準備会
	PM	
Day 4 Thursday August 22nd	AM	施設見学: プラパ大学病院(分娩病棟・高齢者センター) 施設見学: 保健センター(Sub-district hospital) 家庭訪問(高齢者、小児)
	PM	
Day 5 Friday August 23rd	AM	ナーシングスキル大会の発表練習 ナーシング・スキル大会&国際文化交流 (タイ・中国・ブータンの学生と国際交流)
	PM	
Day 6 Saturday August 24th	AM	施設見学: HV/AIDSセンター・ホスピス(Camillian Social Center)
	PM	パタヤSilver Lake見学
Day 7 Sunday August 25th		アユタヤ王朝遺、日本人村跡見学
Day 8 Monday August 26th	AM	施設見学: 国立高齢者社会福祉開発センター (Ban Banglamung Social Welfare Development Center) 中国の学生とともに海岸で食事
	PM	
Day 9 Tuesday August 27th	AM	プラパ大学にて評価会、参加証書授与 施設見学: サミティベート・シーラチャ病院(Samitivej Sriracha Hospital) サンクスディナー
	PM	
Day 10 Wednesday August 28th	AM	日本へ帰国の途につく

後の参加者を確保できており、学生の関心があることが伺える。

プログラムは、当初はバンコクにある St. Louis College(看護の単科私立大学)を中心とする施設にて演習を行っていたが、2014年よりバンコクから車で約1時間、タイの東部に位置する、チョンブリ県バンセン市にある国立ブラパ大学看護学部(26学科を持つ総合大学)にて演習を行っている(東田, 中田, 竹尾, 2015)。本年度も2019年8月19日から28日までの10日間の演習を実施した。(表2)

本稿では、本学での国際看護論におけるタイでの演習内容と学生の学びについて報告をする。

## Ⅱ. 国際看護論演習までの準備について

国際看護論の概要として、国際的な視点から諸外国の健康問題および心身の健康に影響を与える社会・経済、教育、および文化・伝統的な背景を検討しつつ看護活動のあり方を学ぶため、4年次までの講義・実習を通して日本の看護および看護を取り巻く状況を理解してきた。その集大成としてタイでの演習を行い理解を深めるため、事前学習として、1. 日本の看護教育システム、2. タイの社会・文化・宗教・日本との関係、3. タイの教育、4. タイの保健・保険システム、についてグループで文献を調べまとめたものを発表しあい、学修を深めた。また、ブラパ大学が主催する国際ナースング・スキル大会が演習の第5日目に行われるため、プレゼンテーションの準備を行った。発表は、①日本の看護教育について、②生活習慣病について、③日本の祭事についての3つとし、日本語で資料を作成後に英語版を作成し、発表原稿を作成した。プログラムにはそれぞれの国からのパフォーマンスがあり、佐久大学からは子どもから高齢者まで行うことができる「ラジオ体操」と、伝

統的な踊りの一つである「ソーラン節」を行うことを決め、練習や服装などの準備を行った。

## Ⅲ. プログラム内容

### 1. ブラパ大学での施設見学・講義

#### 1) 中央図書館

中央図書館は、ブラパ大学のほぼ中央に位置し、1~6階までの建物のなかに、様々なコーナーがあった。インターネットで文献を検索出来る他に、視聴覚ブースやグループワークルームが設置されていた。日本との大きな違いは、仮眠スペース、ミニシアター、カラオケスペースなどが設置され、学習への集中とリラックス・タイムの区別をつけやすい環境が整えられていた。カラオケスペースでは新1年生が練習中であった。開館時間は8:00~22:00、テスト期間は8:00~0:00であり多くの学生が図書館を利用していた。タイ語、英語のほかにも中国語、韓国語、日本語などの辞書や本が多くあった。日本のコーナーでは多くの童話や漫画本が収集されていた。ブラパ大学には、「日本語学科」があり1学年20名の定員は、人気のある学部だと聞いた。

#### 2) 看護学部の実習室

看護学部の実習室は、病院の病室を想定した作りとなっており、大部屋が2部屋、小部屋が7部屋であった。小部屋にはシミュレーション学修や技術練習ができる人形やモデルなどがあった。心肺停止における蘇生のアルゴリズムを学修するためのプログラムが組まれた人形と機材などがありいつでも実技練習できるようになっていた。タイの学生は、技術のチェック表があり合格点に達しないと、2年次後期の実習に行けないこととなっていた。タイの看護師は、裂創の小縫合や抜糸を行うことが可能なため、縫合の練習もできるようになっていた。また、実習室には専属のアシスタントスタッフが在室しており、練習の物品準備などをしてきていた。器材は、

タイ語・英語表記であった。



写真1 ブラパ大学看護実習室を見学

### 3) タイのヘルス・システムの講義

タイの医療の現状についての説明があった。国の政策として、2017年-2021年までの第12期5ヶ年の健康開発計画が実施されている。目標値としては、①主要疾患(肝がんと冠動脈疾患)の死亡率が、2014-2016年よりも5%減少すること、②患者の満足度が90%となること、③医療職の職務満足度が50%となること、④国家予算の5%以下を医療費とすること、⑤全国で保健医療サービスが統一されること が掲げられている。

2020年には高齢化率が15%となることが予測されており、高齢化に備えたシステムの構築が必須である。現在の死因は1位悪性腫瘍、2位AIDS、3位事故、4位心疾患である。2004年は1位AIDS、2位悪性腫瘍であったが、AIDSの治療効果により死因順位が変化している。

### 4) タイの看護教育

タイの王室と看護の発展は深い繋がりがあることが説明された。

現在のブラパ大学看護学部のカリキュラムは、全143単位であり、共通科目30単位、専門科目107単位、選択科目6単位で構成されている。専門科目107単位のうちの28単位は法律、研究、看護管理、倫理などである。その他の79単位は看護演習や技術に特化した内容で、51単位は講義形式、28単位は実習となっている。1単位あたりの時間数は講義

が15回/単位、実習は8日間/単位である。実習は1日7:30から16:30までが実習時間となっている。1年次は、共通科目を取るため他の学部の1年生と授業を受けることが多く、看護学部で本格的に看護に特化した講義を受けるのは2年次からとなっている。現行の143単位は、多過ぎて学生への負荷が大きい。タイの看護カリキュラムに責任を持つ「タイ看護・助産評議会」は、単位数を127単位まで減少させる方向で動いていると講師より情報を得た。

## 2. 施設見学

### 1) 保健センター: Saensuk Sub-District hospital Health Promotion Hospital(第一次医療、日本の保健センターに相当する)

Sub-District Hospitalは、タイの皆保険(ゴールドカード)を持った住民が受診することができる保健医療施設であり、住民に最も近い公的な医療機関である。週に7日間診療し、特に月～金は、夜20:00まで診察を受け付けている。施設長は公衆衛生士、看護師、保健師であった。多職種は、歯科衛生士、タイの伝統的な療法士(マッサージやハーブ療法)がいるが、医師は常駐せず、月に2回、第二次医療を行っているコミュニティ・ホスピタルから医師が派遣される仕組みである。保健センターでは、外来診療にて薬剤の処方や創傷処置などを行い、必要があれば第二次医療機関への紹介を行っている。薬剤は、看護師が処方できる必須薬剤と医師が処方できる薬剤とに分けて保管されていた。妊婦検診や歯科検診、乳幼児健診、健康教育、家庭訪問などを行っていた。今回の演習では、母子と高齢者の家庭訪問に同行した。

#### (1) 母子の家庭訪問

対象事例: 生後28日の女児のいる家庭。出生後ダウン症と診断されており、今回の訪問では、マタニティーブルーによる母親の育児不安の有無や疲れなどを確認していた。母親

の睡眠はとれており、訪問看護師の質問にしっかり答えていた。

## (2) 高齢者の家庭訪問

対象事例: 60歳代の女性。骨の悪性腫瘍にて右臀部に疼痛があり寝たきりとなっていた。1か月前から訪問を開始しており、当初は疼痛のため希死念慮があった。その後、鎮痛剤を内服し疼痛がコントロールできるようになった。訪問時、訪問看護師、ヘルスポランティア3名とともに起き上がり、歩行器を使用して歩行するまでになっていた。また、ヘルスポランティアの促しでゴムバンドを使って筋力トレーニングを行うなど、関係者はみんな笑顔だった。

## 2) ブラパ大学病院: BURAPHA University Hospital (第二次医療)

ブラパ大学病院は、チョンブリ県にある国立の大学病院で500床の規模である。1984年から、地域住民に医療サービスを提供し、2008年には大学に医学部が併設され、医学教育を始めて10年が経過している。医学部設立後の歴史が浅いため、現在第二次医療施設とされている。地域の第三次医療施設は、チョンブリ県立中央病院、及びタイ赤十字病院である。

今回の演習では、分娩病棟と高齢者病棟の見学を行った。分娩病棟は、陣痛室(5床)、分娩室(2床)、産後室(8床)に分かれていた。タイでは、看護学士を取得すると看護師と助産師の資格が与えられ、助産師として働くことが可能となる。正常分娩であれば、医師は介入せず、会陰切開・縫合など出産の全てを助産師だけで行う。また、乳房管理は産前の健診時から指導をしている。健診はWHOの基準に沿って最低4回の受診を推奨している。健診は有料である。出産後3日目で自宅へ退院となる。退院後7日目までに、助産師が自宅へ電話をかけ、必要に応じて専門チームが自宅訪問を行い、マタニティブルー予防の介入がされていた。

高齢者病棟(13床)は、病棟の環境、看護体制などが私立病院と同様になっており、大部屋3万タイバーツ/1か月、個室は4万タイバーツ/1か月(日本円10万5千円~14万円/月)で無期限の入院が可能な病棟であった。肺結核、精神疾患、暴力を振るうなどの問題行動がある患者は入院できないが、それ以外であれば希望があれば入院ができるシステムになっていた。主に寝たきりの高齢者が入院しているため、褥瘡と誤嚥性肺炎の予防に1日2回の清拭と2時間ごとの体位交換が行われていた。かなり高額の入所料金を支払うことができる富裕層の家族は、バンコク、或いは外国に住んでおり、故郷の両親の介護ができないなどの事情で入所している人が多いとのことであった。



写真2 ブラパ大学高齢者病棟にて

## 3) サミティベート・シーラチャ病院:

### Samitivej Sriracha Hospital (第三次医療)

シーラチャ病院は、バンコクの南東130kmに位置する234床の病院である。中産階級から富裕層を対象とする私立の総合病院でタイ全土にバンコクをはじめ7つのグループ病院を持っている。シーラチャの街の郊外には工業団地があり、日本企業が多く進出している。街には日本人学校(小中学生徒数537人)、幼稚園もあるという日本人が多く居住する地域である。2016年に以前からあった日本人相談窓口を移転し、日本人病棟として内科外来・入院病棟10部屋を併設した。日本語を

話せるタイ人の医師、看護師もおり、日本語通訳が10名(タイ人7名、日本人3名)が在籍していた。2018年の日本人の外来受診数は1712人/1か月、入院は145人/1か月であった。外来受診の主疾患は、1位急性咽頭炎 2位胃腸炎 3位大腸炎 4位高血圧 5位急性鼻咽頭炎であった。タイと日本では、外来での医師と患者の距離感が異なっており、タイは医師と患者の間に机があり、診察のためのベッドは階段が必要なほど高かった。日本人病棟の標記は、日本語英語表記であった。

見学をするなかで、学生は自分たちが実習していた病院や施設との相違に気が付き、積極的に質問をしていた。

#### 4) 国立高齢者社会福祉開発センター:

##### Ban Banglamung Social Welfare Development Center

国立高齢者社会福祉開発センターの目的は6つあり、①高齢者のデータ収集 ②実習の受け入れ ③学習の場 ④福祉施設 ⑤地域貢献 ⑥カウンセリングの目的がある。施設への入所の条件は、①60歳以上のタイ人②犯罪歴がない③感染症(特に肺結核)がない④自分で入所を決めた人⑤入所時自立している⑥精神疾患がなく暴力を振るわない⑦アルコール依存症ではない⑧身寄りや家屋がない⑨貧困で世話をしてくれる人がいないというものである。施設のなかでは、自立度によりグループ分けがされており、グループ1 自立 グループ2 要支援 グループ3 寝たきりに分かれていた。自立している方々は、食事の時間になると食堂に集まりみんなで食事をしていた。70~80歳代の人が多いが、最年少は63歳、最高齢は102歳の方がおり、国立の施設のため入所費は無料となっている。専任の看護師は2名、医師は往診で近くのコミュニティホスピタルから協力を得ていた。240人の定員であるが、現在の入所者は約200名、課題は、極端な介護人材の不足である。介護士は6人、理学療法士は1人である。この状況をカバー

するため、自立している高齢者は、フレイルな高齢者を介護する。生業がマッサージ師の方は、週1~2回マッサージを提供する。家庭菜園が得意な人は、広い庭で花や野菜を育てるなど、お互いに助け合っている状況が見られた。この奉仕作業により高齢者は生きがいを感じているとのことであった。

#### 5) HIV/AIDSセンター・ホスピス:

##### Camillian Social Center

Camillia Social Centerは、イタリアに本部を置くカトリック教が主体(タイでは仏教徒が90%以上)のホスピスであり、HIV感染者の体力維持を図るリハビリテーション室、重症度別の病床、子どもたちの学習室等の施設が設置されている。HIV/AIDS感染・発症者が入所している。母子感染により、HIV感染した子どもからAIDSを発症し身寄りがなくなった方など様々な方がいた。子どもは、小さなころからたくさんの薬剤を忘れることなく飲み続ける必要があり、施設のなかで薬剤の必要性や、自分の感染している疾患について司教から指導を受けながら、学校に通っていた。講義のなかで、HIVキャリアの方がご自分の体験を話される場面では、「生きたい」という気持ちが、自分を死の淵から生還させた。学生へ、人生のなかであなたにとって「価値のあるものは何なのか」という質問をされた。学生たちは一瞬人生の振り返りの時間を持ち、多くの学生が「家族、友達」と回答していた。

HIV/AIDSは日本では、身近に感じるものが少ない疾患であり、訪問したセンターのようなものもないため、学生たちからは今回このセンターを訪れ、話を聞いたり施設を見学することができ有意義であったという感想が多くあった。

### 3. 国際ナーシングスキル大会&文化交流

#### 1) 事前準備

演習第3日目に、プラパ大学(タイ)・国立

温州医科大学(中国)の学生とともにナーシングスキル大会でのプログラムと、事例と準備される物品の発表があった。ブータンの学生は自国の保健医療状況について発表したが、スキル大会には参加しなかった。

事例:

- ・60歳 女性
- ・既往歴: 糖尿病、高血圧 BP170/100 mmHg、RR28bpm、PR92bpm
- ・脂っこいものが好きで、野菜を食べない
- ・体重増加があり、日常動作が難しい状態になっている
- ・変形性膝関節症にて右ひざに痛みがある
- ・倦怠感があり、寝ていることが多い
- ・補助器具が必要である
- ・トイレに行きたいと思っている

発表会では全プログラムは英語にて行われ、看護師役・患者役・家族役などに分かれ、各国20分ずつシナリオを発表する。学生たちは事例から必要な看護を検討し、日本語でセリフを考え教員に相談しながら英語に翻訳しシナリオを作成していた。

## 2) 国際ナーシングスキル大会&文化交流

演習第5日目に行われ、Dr. Pornchai学部長の開会あいさつ、中国、日本、タイの学生が伝統的な催し物を披露した。佐久大学の学生は、法被を着用しラジオ体操とソーラン節を踊った。その後、タイ、中国、ブータン、日本の学生より、自国の看護教育についての発表があった。本学の学生は準備していた、①日本の看護教育について②生活習慣病について③日本の祭事についての発表を行った。

ナーシングスキルの事例発表では、「患者の残存機能を生かし、なんとか自分の足でトイレに行ってもらおう。しかし、体重増加があり心不全などが併発している可能性があるため、状態を確認しながら行うこと。食事指導などではできるところから家族を巻き込んで行う。」ということシナリオを通して伝えた。他国の発表から、それぞれ注目するポイントが

異なっており、自国と他国との違いを感じる体験ができた。

学生アンケートからは、自分たちでシナリオを作ることは難しく、英語での発表は聞いている人に伝わるのか心配だった。しかし、他国の発表から、国の文化や背景の違いを感じる一方で、看護として患者さんのことを第一に思いやることは同じだということが学べた。タイ・中国・ブータンの学生と交流ができて良かった。という意見があり、看護を通じて他国との違いだけでなく自国との共通点などを見出していた。また、現在自分が勉強していることが全てではなく、他の国の学生がどのように学び看護師になるのかを知る良い機会ともなると述べていた。



写真3 国際ナーシングスキル大会の様子

## 4. ブラパ大学の学生との交流

ブラパ大学では、学生はボランティアで、研修プログラム終了後に佐久大学の学生と夕食やショッピングなどに付き添い、一緒に楽しむバディ体制が作られ良く機能していた。今回、ブラパ大学の17名の学生がバディ希望に手をあげ、3グループに分かれて街中を案内してくれていた。また、第7日目のアユタヤ遺跡への観光では、5名のバディが同行し、一緒に観光をしたり写真を撮ったりしていた。

今年度は、7月上旬にブラパ大学より5名の看護学部生が佐久大学に研修に来ていた。



その際、国際看護論を履修している学生がバディとなり、夕食などを一緒にする機会があった。そして、この8月の研修がタイの学生との再会の場となり、一層友情が深まっていた。

学生は、お互いに連絡を取り合い、待ち合わせ時間やスケジュールを共有していた。ホテルへの帰宅時間を22時と定めていたが、守られていた。

学生のアンケートには、バディさんたちとタイの有名な食事や観光地に行くことができて良かった。とても歓迎してくれていることが伝わってきた。自分たちが食べたことがない果物を買ってきてくれ、本場のタイを楽しむことが出来て嬉しかった。初めは英語が苦手なので、通じるか不安だった。積極的に話しかけることが出来なかったが、バディさんが何とか伝えようとしてくれ、次第にコミュニケーションを取ることができた。毎日バディさんと会うことがとても楽しみで、良い友達がタイに出来た。という意見があった。

今回の演習のなかで、一番心に残ることを聞くと、「バディさんとの出会い」と述べた学生が数人おり、言葉がなかなか通じないなかでも、お互いに一生懸命コミュニケーションを取ることので得られた満足感が大きいことを伺わせた。このような経験は、将来、看護の職場でも活かされることと思う。

#### IV. アンケート結果や最終レポートから見える学生の学び

##### 1. コミュニケーション

タイや中国の学生は自然と英語を話せており、語学の勉強法を尋ねると「読む・書く・話す」を全てやっていると教えてくれた。日本とは意識から違っていると感じた。英語を話せなかったことをとても恥ずかしく感じたが、これから継続して勉強していこうと思った。

放課後にバディさんたちと食事や買い物をするなかで、英語がなかなか通じず分からない単語もあったが、写真を見せたりジェスチャーを交えたりと非言語的コミュニケーションの大切さを感じ、言葉が話せなくても相手の気持ちを察することは、今後患者さんとの関わりでも活かせると思った。

##### 2. 現地に行くことで実感できる経験

タイの病院で使用されているベッドは、ベッドの高さがとても高く固定されたものだった。その背景には、タイの弱者には手を差し伸べ徳を積むと報われるという文化があり、高齢者が動かなくてもよい環境となっていた。日本では、残存機能やADL維持のためできることは自分で行ってもらおうという視点を大切にしているため、国の文化によって看護の在り方も異なるということが分かった。

国立病院と私立病院の見学をするなかで、病床環境の違いがとても顕著であることが分かった。それは、タイの保険制度によるもので受診できる病院が限られているからであり、貧富の差によって受けられる医療に差が大きくでてしまうことは、とても残念なことだと感じた。

#### V. 今後への課題

国際看護論の受講にあたり、学生たちは「タイ語が必要になるかと思ったが、こんなに英語が求められるとは思っていなかった。」と述べており、現地に行くことで英語でのコミュニケーションの必要性を感じていた。今後、国際看護論の履修を希望する学生は、入学時より本学の英語の授業を取るように薦める。また、事前学習時に英語の表現法を学ぶ時間を入れる。

今年度より、ブラパ大学からの研修生を受け入れ佐久大学としてバディ制度を導入したことで、今回の演習で再会する機会となり、

相互理解が深まるきっかけとなった。ブラパ大学の学生は、バディとしてたくさんのかつを経験をさせてくれていた。佐久大学としても、今後バディ制度を充実させていく必要があると感じた。

## VI. まとめ

今回の国際看護論の演習では、履修学生12名全員が積極的に見学、講義、タイや中国の学生との交流を行っていた。演習期間中は、質問を自発的にすることで、タイと日本との相違点を発見し、理解を深めていた。また、帰国後に提出されたレポートからも、さまざまな学びがされており所定の単位を取得することができた。

タイの病院や大学施設を見学することで、国による看護教育の背景や医療制度の違いを実感し、看護の求められる技術の違いや看護の本質として変わらないものを認識していた。また、家庭訪問やバディさんと一緒に街に出て生活を体験することで、文化や信仰により、人々が大切にしているもの、家族同士の関りについても理解を深めることができた。

今後、国際化が進み今回学んだ視点がより重要視されるということを履修学生は様々な体験から学び、実感することができていた。こういった学びができる機会は大変貴重であり、将来の自分のキャリア形成にもつながっていくであろう。また、ブラパ大学のバディ

をしてくれた学生との絆も今後継続され、世界と繋がっていく足掛かりとなったと感じている。

## 謝辞

タイのブラパ大学において、国際看護論の演習を実施するにあたり、Dr. Pornchai、Dr. Jinjuthaをはじめ多くの先生方、また関係者のみなさまのおかげで、実りある学修が行えたことに心より感謝申し上げます。また、学生にとって、ブラパ大学のバディの学生や他国の学生と、言葉の壁を越えた仲間の付き合いをし、たくさん刺激をもらったことに御礼申し上げます。

## 引用文献

- 蛭田由美, 久保宣子, 山野内靖子(2017). 看護基礎教育における国際看護学の教育プログラムの開発に関する研究—わが国の大学看護学科における国際看護学教育の実態—。八戸学院大学紀要, 54, 39-54.
- 須藤恭子, 樋口まち子(2014). 国際看護学実習前後の学生の意識の変化. 国際保健医療, 29(4), 277-288.
- 東田吉子, 中田覚子, 竹尾恵子(2015). タイ国、ブラパ大学における国際看護論の実施と学習の成果. 佐久大学看護研究雑誌, 7(1), 65-74.